



シャンダイア物語

第六部 統治の指輪

福田 弘生

Anima Solaris



第四十五章

『パール』

ベロフがミルバ川を渡った頃、エルセントの遙か北方では、南下を続けるマコーキンとパールの軍が、同様に南下しているロツティ子爵の軍と交戦状態に入ろうとしていた。巨大な牛に似た獣にまたがったパールはペイジ、ヒース、シャイアの三人の仲間と轡を並べた。その四人の前でロツティの騎馬隊が流れるように左右に展開した。

それを見てパールは思わず声を上げた。

「あいかわらず見事だな」

ロツティの二万の騎馬隊の中から五千ずつ二隊が、それぞれ左右に大きく展開してパール達の視野いっぱいには広がった。その両翼の中央に、鳥の胴体のように、二千、三千、三千の三段構えの突撃隊が待ち構えている。ロツティは中央の三千の隊にいるはずだった。さらに二千の遊撃隊がパール達の後方に迂回している情報も入っていた。

ペイジがうなった。

「パール様、ちよつときつい相手ですね」

「左右の一万は相手にするな、ロツティの後ろの三千も、遊撃隊の二千も関係無い。相手は正面の二千と三千、ロツティだけを叩けばいい」

パールの軍は二万、すべて騎馬で、マコーキンの兵一万はバルツコワ将軍が率いてパール軍の後ろに布陣している。病氣らしいマコーキンはその軍の後方部にいた。

一方、マコーキンの腹心の参謀バーンはパールの陣営にいる。パールの後方に馬を止めていたバーンがパールに近づいた。

「私はかつてカインザーのケマール川で、今のロツティのような陣で敵を待ち受けた事がある。だがオルドン王はすべての仕掛けを苦も無く打ち破って通り抜けた。しかし今度は囲む側がカインザー、とてもあの中央を突破してロツティに迫るのは無理だ」

パールはヒースに尋ねた。

「もう一人、エンストーン卿の歩兵はどこにいるんだ」

「ロツティの後方、約五キロの地点にいます」

バーンは再度警告した。

「パール將軍、やめたほうがいい」

パールは年長の貴族に微笑んだ。

「大切なのは皇帝陛下のために、俺が出来ることを全力でする事ですよ」

そう言ってパールは獣の首に下げた袋から魔法の餌を取り出して獣に与えると、大きく手を振って攻撃準備の合図をした。

.....

マコーキンと一体になったミリアの鳥は、金と銀の翼をひるがえして、すでにランスタイン山脈の頂上が見えなく

なる程にタルミの里に近づいていた。そのミリアがマコーキンに伝えた。

(戦闘が始まるわ)

(パールが戦闘を開始するのか、私の体は何をしている)

(ぼんやり)

(何だと)

(勘のいいバーンは私の魔法がからんでいると思っ
ていらしいけど、とりあえず体調不良と兵達に言っ
ているみたい。パールは二万の兵を持っているから
ロツティとの戦いに出たのよ)

ミリアの心の中にマコーキンの悪態がしばらく響
いた。その子供っぽい悪態を自分がけっこう楽し
んでいる事にミリアは気付いた。その後ミリアが言
った。

(パールではロツティに勝てない)

(どうして、確かにカインザー人は強いけど、パ
ールもソントールではかなり強いほうだと思っ
たわ)

(性格だ、ロツティは状況に応じて引く事を知っ
ている、あれだけの兵馬が彼の命令で自在に押し
出したり引いたりする)

(そうね、単純なカインザー貴族にしては歴史
的変人だわ)

(パールは常に自分を投げ出す、だから強いが、
ロツティには通じない)

(たぶん戦闘そのものより、結果が問題になると思う)

(それは常にそうだろう)

(そういう意味ではなくて、パールの事。負けた後の彼がおそらく問題になると思う)

マコーキンはしばらく黙った後、応えた。

(早く戻りたい)

(ええ、私もそう思い始めたところ)

ミリアはまだパールという男の正体を掴みかねていた。しかし、もしかしたらタルミの里でこれから起きる出来事以上の、大きな出来事が起きるかもしれない予感がして二色の翼を震わせた。

.....

竜の背にまたがってセントーン王国を南下していたセルダンは、進路がずいぶん内陸に入っている事に気付いていぶかしんだ。

「なあアンタル、エルセントは海に面しているんだから、海岸沿いに南下したほうが近いんじゃないか」

セルダンの心に女性の声で返事があった。

(大事な戦いがあるのよ、それを見てから行きなさい)

セルダンはびっくりした。

「エルデイ神、なぜこんな所に」

(私はザイマンにいるわよ。エイトリがセントーン入りし

ているので、彼を通じて声を届けているの、そしてドラ
ティの息子に今の進路をとってもらっているの)

「エイトリ神もセントーンにいるのですか」

(ええ、テイリン達と旅をしているわ)

「それで、僕が見るべき戦いは誰と誰がするのですか」

(ロツティとおそらくパール)

「ああ、それならば僕もロツティと共に戦います」

(だめ、それにおそらくロツティは負けないわ)

「ならば僕はエルセントに急いだがほうが」

(あなたはパールを見たことが無いでしょう、見ておいた
ほうがいいの)

セルダン^①はエルデイ神の言葉に不安が混じっているのに
気が付いた。

(そう、不安なの。あなたの黒い冠の魔法使いとの戦いは、
まだ終わっていないと思うのよ)

(いや、終わっているよ、セルダン王子の戦いは終わって
いる)

アンタルの声^②が割り込んだ。

(竜の子、あなたにはわかるの)

(うん、魔法と魔法の間に糸のような繋がりが見えるんだ。
セルダン王子とあの魔法使いの間の魔法の糸はもう切れて
いる)

(ならば予測不能の結果が出るという事ね、セルダン注意

して)

「わかりました」

セルダンは風の中に目をこらした。やがて大地を数万の軍勢が疾駆している様子が見えた。そして雄叫びと共に人馬が激しくぶつかり合い、戦闘が始まった。

(第四十六章に続く)

著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_/chandaia/index.shtml

とうち ゆびわ
統治の指輪 —シャンダイア物語—

2008年9月8日 第1版第1冊発行

著者 福田 弘生 (Hiroo Fukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電腦工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電腦工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。